

夢とは——稀神サグメ

Hr

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

サグメさんの短編書きたいなと思ひまして、久々に筆を取りました。書きやすいと思つてドレミーを混ぜつつ妄想してたら勝手にシリアスになるからこれまた不思議。

本文が短いのは申し訳ない。

目次

## 夢とは——稀神サグメ

恐らく私は夢が嫌いだ。

いや正確には夢が嫌いな訳ではない。悪夢だ。穢らわしい悪夢が嫌いなのだ。私にとつての穢れは何よりも疎ましい存在であり、葬り去りたい過去でもある。

そう考えるとやはり夢には罪がない。

夢とは、要するに脳の情報整理の一貫で、悪夢とは、過去のトラウマがバグのように現れる現象なのだろう。もしトラウマでなければ、その原因は心の病みとも言えるだろう。

私にはまだトラウマと呼べる事象はない。それはそれで喜ばしい事実だ。しかしそうなれば悪夢を見てしまうと、それは心の病みが引き起こした事実だと確定されてしまう。

私は夢が嫌いで。

正確には悪夢が嫌いで。

より具体的に述べるとするのなら、悪夢を見ることによって自分の中の、それも心の病みを知ることによって恐れを抱いているのだ。

穢れたくないからだ。

永遠とは、穢れのない純白でなければ意味を成さない。

だから悪夢の根本である夢を、初めに嫌う。

「サグメさんに、こころも嫌われるとは些か心外ですね」

ゆつたりと瞼を閉じれば、また夢を見る。

夢の世界ではやれやれといった口振りで、世界の管理人であるドレミーが呟いていた。

ドレミーは私からの返答を待たずに、自らを主張する吐露のように言葉を続ける。

「夢を嫌わないでくださいよ。それでも私は貌なもんで、悪夢を食べないと生きるのが辛くなります。まあ所詮悪夢なんて食べ物に過ぎませんし、貶されようが大して怒る気もしませんけど」

何とも無関心な奴だ。

昔から、私が幼い頃からドレミーはいつもこの態度である。へらへらと笑い過ぎる彼女は常に夢見心地なのだろうか。

私は重い口を開いて。

「夢は嫌いよ。昔から悪夢も嫌いなの。穢れてるって真実を知るのが怖くて怖くて仕方がないのよ。ドレミー、ごめんなさいね。例えば貴女が素敵な存在でも、私は夢を好きになれそうにないわ」

心に残した思いを、残さずに言ってみよう。

ドレミーは相変わらずへらへらとした笑顔で過ごしている。なんだか私は酷いことをしてしまったと、少しだけ良心が傷ついていた。「それでしたら悪夢が現れた時には、私が気が付かないように食してあげますよ。あれ凄く美味しいので、最近は地上の悪夢ばかりで舌の方も飽きが訪れる頃ですし」

「悪夢の味なんて、知りたくない」

「そう言うと思ってましたよ」

「内側から穢れに犯されそうなもの」

「その言葉も予想してました」

「貴女はいつも笑って、何かを見据えている。夢の中だからなのか、それとも潜在的な能力なのかは分からない。どちらにせよ素敵なことだと思おうわ」

「嬉しい言葉ですねえ」

ドレミーは喜びニヤつきながらも目を伏せている。彼女には分かっているのだ。私の心境も、私の病みも。きっと悪夢だって既に食べ終えてるに違いない。

ここは夢の世界だ。

現実ではないから、ドレミーが許す限り空想は面白いほど現実として再現される。

私は目を伏せたドレミーに対して、静かに片手を向けた。

漆黒の“銃器”が非現実のなかで恐ろしいくらいに存在感を高めていく。

「ごめんなさい。ドレミー」

「謝らなくても良いですよ。私と貴女の仲で、いつものことですから」

乾いた銃声が鼓膜を通り脳へと刺激する。それと同時に罪のない夢の管理人は倒れ、額から紅色の血を流す。

それは何万とも、何億とも繰り返し眺めた光景でもある。

私は夢が嫌いで、穢れることは許されない。

悪夢を扱う彼女とこうして触れ合うことすら、恐らくは穢れになるかもしれないから。

だから。

夢から覚める前に、形だけでも殺しておく。

「全く——貴女も苦勞してますね」

もう私は何も語らなかつた。

ドレミーは消え、私は目覚め、またいつも通りの日常が始まるのだ。

だからこれ以上、彼女と共に夢を見るわけにもいかない。

死体に扮したドレミーは言った。

「永遠なんてただの呪いですよ」

こうして私の夜は明け、また朝が来る。

早朝の陽射しは厭ってくらいに、美しかった。